

素 酸

大 同 昇 平

新 潮 社 版

酸

素

大岡昇平

新潮社

素 酸

昭和三十年七月二十六日 印刷
昭和三十年七月三十日 發行

定價 參百圓

地方賣價 參百拾圓

著 者 大岡昇平

發行者 佐藤亮一
東京都新宿區矢來町七一

印刷者 曾根盛事
東京都品川區大井寺下町二四〇

發行所 株式會社新潮社
東京都新宿區矢來町七一

電話東京(34)代表七二一—八番
振替東京 八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。)

印刷・扶桑印刷株式會社 製本・新宿加藤製本所

Printed in Japan

© S. Ooka, Tokyo, 1955.

酸

素

第一章

一人の小男が舷側にもたれ、陸を眺めてゐた。海はまだ暗かつた。波を消された港の水が擴がつてゐた。ドック、突堤、倉庫、起重機、煙突など、港の水際を形づくる設備が、さまざまの光度の燈火を、飾花のやうにつけたまゝ、次第に輪郭を現はさうとしてゐた。遠く背景の六甲の山は、茜色にあげかける四月の空に影繪を描き、その襞の文様を明らかにするつもりしかつた。

小男の妻と子はこの陸のどこかで、多分眠つてゐるはずであつた。三年會つてゐなかつた。妻は彼が歸れない理由を知つてゐるが、子供は理解しないであらう。彼等是不幸であらう。しかし天皇の名の下に、戦争に驅り立てられてゐる、この陸の住人の大多數に比べて、別に不幸といふことは出来ないといふ小男は考へてゐた。そして今彼がその陸の沖まで來たのも、家へ歸るためではなかつた。

赤い標識燈をつけた水上署のランチが、夜通し浮標に繋がれたこの外國船の周圍に動き廻つてゐた。

檣側から一つの高い人影が、マドロス風に肩をゆすつて近寄つて來た。

「ヘーイ、洪、何してゐんだ」

その訛の強い英語の中に挿まれた「洪」といふ音に、小男はすぐ振り向き、

「何もしてないさ」

と返事することが出来た。それが二年以來この日本人の姓であつた。少なくともチャイナ・タウンの薄暗い四階で質造された身分證明書にはさう書いてあつた。

「ブルルー、やにウオター・ポリスが走つてやがんな。どこへ行つてもポリスばかりだ」

「戦争だからね。奴等は神経質になつてゐる」

「奴等の戦争の道具を運んでやつてゐる俺達でもか。ヒットラーのきんたまを抜くのを後廻しにして、こん度もしこたま持つて來てやつたのに」

甲板は近づく荷役に備へて、ロープを甲板覆ひも、取りかたづけてあつた。

「一時間もすりや忙がしくなる」と小男は呟いた。

「センコウ・エキस्पレスの連中は仕事がうまい」と相手は答へた。

一時間たつて、エキस्पレスのボートが、沖仲仕を満載した舳を何隻も曳いて、靜かな水面を渡つて來るさまを、小男は思ひ浮べた。

陽氣な仲仕達はやがて艀口を開け、ヨーロッパへ廻せば「ヒットラーのきんたまを抜く」のに十分なはずの積荷を取り出すであらう。それがいつかは抗日統一戦線の兵士の上に、彈丸となつて降りかゝると想像する苦痛に、小男はもう馴れてゐた。とにかく彼はそれを運ぶ貨物船の水夫であつた。

彼はこの國に陸揚げしなければならぬものを別に持つてゐる。曳ボートに乗つて來る制服制帽

のエキスプレスの貨物係であれ、或ひは仲仕達の一人であれ、「岡部」と名乗る日本人に渡すものがあつた。

その人はこの船の船員にいふであらう。

「お尋ねしますが、この船に陳といふ中國人の水夫はゐないでせうか」

「陳は大勢ゐますが、陳なんていふんですか」

「陳信夷」

「いや、ゐませんね」

その人は小男が會話者の聲が届く範圍にゐて、例へば次のやうにいひながら、歩み寄るまで、同じ質問を繰り返すはずである。

「あゝ、陳信夷ですか。知つてます。サン・フランシスコで會ひましたが、この船に乗れないのを、残念がつてゐました。どなたですか」

そしてもしその時相手が宿命的な「岡部」といふ名を發音することが出来たら、

「あゝ、岡部さんですか。そんなら、陳君から頼まれて來たものがあるんです」

續いて「こつちへいらつしやい」とその時は空虚なはずの船室へ誘ふか、或ひは「ちよつと待つて下さい。すぐ取つて來ますから」と待たせるかは、その場の情況、つまりこの見せかけの偶然が、同席者に與へた反應の程度による。

彼は無論岡部に澤山話することがあつたが、會話は消え去る。岡部以外の陸の人達に信じさすに足る何事もない。

下の船室においてあるあの厚さ二寸ばかりの箱を渡さねばならなかつた。それは美しい菓子箱の包装と商標を持ち、岡部が上衣の裏に忍ばせて税關を脱れることを、船員も「エキスプレス」の役員も見逃す仕來りの品物である。事實箱の上部には色とりどりのキャンデーが並べてあるが、底三分の一はソヴィエトの對芬政策の「正當さ」を、無智な日本の「同志」に呑み込ませるのに必要な、情報とテーゼによつて占められてゐる。

小男はその印刷物がこの船の運ぶ數千噸の鐵屑が、中國の「同志」に與へる損失を蔽ふに十分だと、思はねばならぬ。

水が明るくなると共に、水上署のランチは陸の方へ去り、あたりにしばらく動くものはなかつた。

「まだ間がありさうだ。下で一杯やつて來るか」

と小男は丈の高い同僚を誘つた。

「まつたくお前は好きだな。荷役が済めば上陸して、元町でしたゝか飲めるぢやねえか」

「俺はあがらない」

「どうして？ もとみたいに面白いこともなくなつたが、日本の女の子はもてなしがいゝぜ」

「俺はいやだ。彼女達が俺達中國人にそんなにもてなしがいゝとは思はない」

小男は元町裏の水夫相手の酒場に行くことは出来ない。よく訓練されたこの國の特別高等警察の一人が、そこにもまぎれ込んでゐて、彼の中國名前と中國語と、海光に焼けた皮膚にも拘らず、三年前の大阪本部事件の檢舉に洩れた立花弘を認めたら、面倒である。だから彼はこの港の

沖で「岡部」が来るのを待つてゐなければならぬのである。

別の小男が「扇港エキスプレス」の赤煉瓦の建物に凭れてゐた。突堤はそこから長く港の中に延び、隣りの突堤との間に凹形に區切られた水が、夥しいランチや舢や團平船によつて埋められてゐた。音が沖から次第に目覺めつゝあつたが、それら小船も、岸壁に停つたトラックもまだ眠つてゐた。

小男のソフトのリボンは汗で汚點になり、絲がほぐれてゐた。黒のサージの背廣服の襟、肩、肘、脇、膝が光り、彼の現在の靜止的姿勢に拘らず、これがなかなか活動的人物であることを語つてゐた。折返しのないズボンの裾から、木綿の靴下が歪んだ短靴の上にたるんでゐた。

汚れた顔に眼は光り、頬骨はとがつてゐたが、權力に與して働く者特有の、どこかのつべりした感じがあつた。

同じやうなサージの背廣を着た人物がもう二人岸壁にゐた。一人は岸壁の繫留枷に片足をかけて海を眺め、一人は遠く突堤の先の物賣り小屋の前に腰を下して、煙草を吸つてゐた。

ちえつ、仕様がねえ奴だ、と小男は考へた。人待ち顔に煙草なんか吸ひやがつて。目立つちやねえか。テストにやいゝ成績だつたさうだが、新米はやつぱり駄目だ。あとで油を搾つてやらう。

小男は待つてゐた。今朝この岸壁から沖の外國船へ行くはずの二人の人間が、たしかに舢に乗るかどうかを確かめねばならぬ。それがすんだら夕方までは暇だ。署へ歸つて將棋を指さうと、煙草を吸はうと勝手だ。荷役を終つた仲仕達と一緒に、大事なものを持つて歸つて來た時、二人にまた用事がある。

草履を穿いた仲仕の小頭が、欠伸をしながら溜りの硝子戸から出て来るのを合圖に、岸壁は急に賑かになつた。曲藝師の穿くやうなパッチに、大きく紋を染め抜いた半纏を羽織り、肩當と辨當箱と鉤を腰につけた仲仕達が、足速に四方から集つて來た。纜つた舳も身動きし始めた。目的不明の和船が一舟のろのろと、遠い造船所の船臺目指して漕いで行つた。遠く霞んで點滅してゐた港口の燈臺の光が消えた。沖の船のどれかが鳴らした汽笛の音が水面を渡り、長い倉庫の壁に反響して、唸りを長く水の上の空に残した。

二階建の「扇港エクスプレス」の事務所は、中央部だけ三階になつてゐる。「展望臺」と呼ばれてゐるその室は、四方に窓が明き、殊に港に向いた側は、天井から床まで透硝子が張つてあつて、港の全景が見渡せる。一基の棒狀の望遠鏡が窓に密着して据ゑつけられ、顧客の船が入港してからは、泊り込みの事務員が交替で見張つてゐる。

第三の小男がその望遠鏡に取りついて、外國の貨物船を眺めてゐた。甲板には人が多くなつてゐた。褐色の胸毛を現はした西歐の水夫、丈の低い中國の水夫の間を、原色のタバンを巻いた少女が何か叫びながら縫つて行く、その口の形まで、聲は聞えぬながら、見分けられた。

サーヴィスの娘だな、これからあの船へ行けば、うまい紅茶が振舞つて貰へる、と小男は考へ、微笑んだ。

彼はかうして望遠鏡で港を見るのが好きであつた。彼はその職場「扇港エクスプレス」を愛してゐるやうに、曲つた陸の線と三つの防波堤によつて扇形に限られてゐるところから、「扇港」と綽名されてゐる神戸港を愛してゐた。

出入する各國の船舶のさまざまな設計、船樓と構成物、亂立するデリック、港に臨んだ船臺から放たれる新造船の赤と黄、霞む起重機を愛してゐた。

戸田信雄は詩人であつた。自分の勞働——と彼はその貨物係の職を考へてゐた——から生れた感情を、自由な詩形に吐露し、それを夜西宮の小さな家で、幼い妻に讀んで聞かせるのに楽しみを見出してゐた。

朝、港のあらゆる色彩は目覺め、

紺碧の空の下、

高らかにガントリー・クレーンは歌ひ、

水に飛ぶ海鳥の聲と競ふ。

戸田は最近この「ガントリー・クレーン」と題する詩が、少なくとも五百人の人の眼に觸れるといふ、限らない喜びを持つたところであつた。「リベット」といふその同人雑誌が、紫のインクも鮮やかならざる謄寫版刷にすぎなかつたのが、唯一の遺憾であつた。

二ヶ月ばかり前勤めの歸りに、彼はその雑誌を元町の横町の本屋で初めて見た。三十頁ばかりの薄い紙面を埋めた作品は、神戸在住の文藝愛好家、特に勞働者によつて書かれたと編輯後記にあつた。

宮本といふ編輯兼發行人の署名を持つた石川啄木論を卷頭に、葺合の製鐵所の職工が書いたコ

「モラスな職場風景、南支戦線の兵士の妻の手記に、新開地の喫茶店の女給と川崎造船所の事務員のはかない情話が點綴されてゐた。「神戸の労働者諸兄姉の加入を望む。同人費五圓」とあるのに誘はれて——前述のやうに戸田は自分が「労働者」だと思つてゐた——一週間躊躇した後、奥付に誌された編輯所を訪ねて行つた。

それは山手の、片側が石崖になつた狭い路次の奥の、二階屋であつた。下は船員の留守居の家族が住んでゐるらしく、玄關に石版刷の帆前船の畫がかゝり、茶の間で子供の泣く聲がした。階段の下から内儀が呼ぶと、二階の話を止めた。

三十四五の男が降りて来て、「宮本です」といつた。要件を聞くと一つ吐息して、「お上んなさい」といつた。二階の六疊の間にあるのは、小さな机と本箱だけであつた。くたびれた背廣や緋の銘仙の三人の先客は、みな同人といふことであつた。自己紹介を終り、おづおづ原稿に五圓札を添へて出すと、戸田はあつさり加入を許された。

編輯長の宮本は附近の授産所に書記として勤める傍ら、好きで文學をやつてゐるのだといふ。恐ろしいほど痩せて、こめかみの皮膚が、骨に張りついたやうであつた。猫背の姿勢は話の合間に、机上の謄寫用の鐵筆板に向ふ時、一番しつくりして見えた。その日戸田は啄木の未發表原稿について新知識を得て歸つた。

ひと月経つと、戸田の詩が載つた雑誌を持つて、宮本が社へ訪ねて來た。改めて「ガントリー・クリーン」の労働者の感覺を賞めた後、宮本は展望臺から港の景色が見たいといつた。しかしこれは外來客を入れるのを禁じられてゐる室であつた。宮本はそれでは一度曳ボートへ乗せてくれ

ないか、といった。

「外國の貨物船でも、一度見せてくれませんか」

これは出来ないことではなかった。沖仲仕の小頭に少しつかまれば、舁へ乗せてくれないこともなかった。つかませる金額をいふと、宮本はあつさり承知して、次の機會に頼むといつて歸つて行つた。

外國船が檢疫のため港外に碇泊し、事務所へ泊りとしまつた夜、戸田は事務所を抜け出して、「リベット」の編輯所まで知らせに行つた。一人の若い客がゐた。林といふ名で紹介されたその新しい同人は、最近東京の大學を出て、阪急の神戸事務所に就職したばかりだといふ話である。血色のいゝ頬と高い丈が、「リベット」の同人に似つかはしくなかつた。

「どや、君も一緒に行つてみんか」と宮本が誘つた。

「さう大勢では」と戸田が抗議する暇もなく、

「結構ですね。構ひませんか」

と林といふ青年に、人なつつくく笑ひかけられると、もともと抗議は別に根據のあるものではなかつたので、戸田はつい、

「えゝ、一人でも二人でも一緒ですわ」と答へてしまつた。

「では、よろしく願ひします」

と林は懷中から紙入れを出し、小頭に渡す金を出した。少し餘分であつた。戸田がそれをいふと、

「いゝですよ。いゝですよ。あゝいふ連中には少し多い目にやつとく方が、いゝんぢやないですか」

と青年は笑ひながらいった。その鷹揚な態度と東京辯が、戸田の神経にさはった。

林は文學の話はしなかつた。「リベット」といふ題名は、いかにも神戸で出る雑誌に似つかはしい、貿易港であると同時に重工業都市でもあるこの市を象徴してゐる、と戸田がいふと、林は笑つて、

「リベットなんて近頃の造船ちや使はないんぢやないですか。大抵は熔接でせう」といった。

戸田は二人に翌朝五時きつかりに「扇港エクスプレス」の前へ来るやうにいつて歸つて來た。

その五時に間近かつた。港はもう完全に明け放たれ、右の方兵庫の運河の入口には、鷺が群れてゐた。浮遊する港の残滓を蹴ふらしく、一羽が突然羽を收め、身體を圓めて、彈丸のやうに水面まで落ち、忙がしく水面を羽搏いてから、ゆつくり岸壁の方を迂廻して、中空へ上つて行つた。

曳ボートの運轉手がモーターを始動する音を聞いて、戸田は展望臺を下りた。金ボタンのダブルの制服を引つ掛け、正面に Senko Express と金糸を縫取つた庖つき帽をかぶると、係長に「行つて來ます」と挨拶して、ゆつくり階段を下りて行つた。

事務所の前に、まだ宮本は來てゐなかつた。戸田は建物に凭れてゐる小男に氣がついたが、そのずり落ちた靴下は、たゞ「變な奴」といふほかは、詩人には何も語らなかつた。彼は草履を穿いた小頭に、昨夜頼んどいた二人の見物客のことを、念を押しに行つた。

「戸田はん、ほんまにこんどだけでつせ。このごろ大分うるさいよつてな」

と色黒の肥つた親分は横を向いていつた。

さうだ、まつたくこんどだけにして貰はう、どうもあの「リベット」の連中のやり方には、押しつけがましいところがあつて氣に入らない、と戸田は考へた。

その時彼は肱に觸る手を感じた。振り向くと宮本の瘦せた顔が、齒を出して笑つてゐた。仲仕の中に混つても目立たないやうに、カーキ色のズボンに、工場の守衛のやうな詰襟を着てゐた。

「お早う。遅まりました」

宮本は手に「リベット」を二冊持つてゐた。

「あゝ、宮本さん、來てはつたんですか。まだちよつと間がありますわ。林さんは？」

「もうぼつぼつ来る頃やけど」

宮本は眉をひそめ、海岸通りの街路に遠く眼を放つた。腕時計は五時五分前を指してゐた。

「早目に來いいうたんやけどな」

戸田はとにかく宮本を親分に紹介した。親分はじろつと宮本を見て、黙つていた。

「こんどだけや、いふんですわ。歐洲戦争からこつち一段と煩うなつたんやさうでつせ」と戸田がそばから説明した。

「すみません。もう頼みません」

「あそこに變な奴が來てるし」

戸田は宮本の顔が歪んだのに驚いた。宮本は彼が顎でしゃくつて見せた方に、顔も向けなかつた。

戸田が振り返ると、靴下のずり落ちた小男の姿はそこになかった。

「おや、ゐない」

「やめや」

と不意に宮本が叫んだ。手の中で「リベット」をくるくる巻くと、頭の上で振った。そしてばつと戸田の傍を離れた。

「どないやね、一體。これ、宮本さん」

後姿はどんな遠ざかりつゝあつた。戸田が追つかけるために、一步踏み出さうとした時、例の小男が、建物の蔭から出て、宮本の脇を持つのを見た。

遠くて聲は聞えなかつたが、

「おい」

といつたらしかつた。宮本は抵抗しなかつた。二人は散歩者のやうに並んで、進路を續けて行つた。

あの卒業生がスパイだつたらうか、と「岡部」こと宮本は、小男に脇を取られて、機械的に足を運びながら考へた。血色のいゝ若造を信用しちやいけなかつたのだらうか。奴等は此頃やつと拷問に強くなつたといふ話だつた。古い連中がみんな持つて行かれた今、奴等も使へないとすると、誰を使つたらいゝんだ。しかし今日のことを知つてゐるのは、詩人と彼奴と三人きりだつた。そして來なかつたのは彼奴だけだ。

「あの船へ何しに行くつもりだつたか、いふんだらうな」